

日本初の有人施設

国際宇宙ステーションに設置された日本実験棟「きぼう」は、日本が初めて開発した有人宇宙施設だ。本体となる「船内実験室」は長さ11.5mの円筒形で大型バスほどの大きさ。内部は地球とほぼ同じ気圧に保たれており、飛行士は普段着でステーションの他のエリアと行き来できる。

日本実験棟「きぼう」を利用した「宇宙スタジオ」のイメージ。内部が見えるよう壁を透視して描いている（パスキュール/スカパー-JSAT/JAXA提供）

20XX年「宇宙スタジオ」から番組配信!?

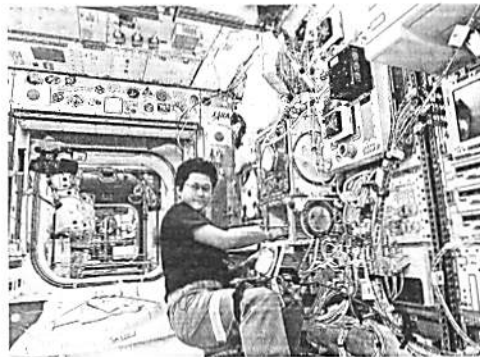
実験棟「きぼう」活用模索

2025年以降に国際宇宙ステーションをこのように利用するか。24年までの参加しか決まっていないステーション計画を巡り、日本が参加継続に向けた議論を本格化させている。米国や欧州が30年ごろまでの運用延長を検討しているのが背景。米欧に足並みをそろえることで、日本も月や火星に飛行士を送るための足がかりを維持できそうだ。ただ多額の資金がかかるのが課題で、政府は日本実験棟「きぼう」を広く開放して民間利用を促す方針。宇宙から番組をリアルタイム配信するスタジオを開設するアイデアも浮上した。

乏しい成果

ステーションにきぼうが完成したのは09年。米国やロシアの居住棟などに比べて「広くてきれいな」と各国の飛行士に評判だ。日本は飛行士の滞在を通じて有人宇宙活動のノウハウを蓄積。医薬品開発に役立つタンパク質の結晶化実験やマウスを使った生命科学実験を実施する。宇宙技術を持たない発展途上国の小型衛星を放出するなど国際貢献も果たしてきた。ただ国民の目に見える成果に乏しいのも事実。年間300億円超、総額1兆円

日本、25年以降も国際ステーション参加へ 資金調達へ民間利用促す



日本実験棟「きぼう」の船内実験室で作業する日本人飛行士の金井宣茂さん（JAXA/NASA提供）

次を見据え

一次人類が目指す宇宙の巨額予算には批判が根強い。参加継続ならさらに多くの資金がかかる。宇宙航空研究開発機構（JAXA）の小山志保・きぼう利用企画グループ長は「将来に向けて、きぼうを利用したいと思う人を増やす必要がある」と話す。

一人人類が目指す宇宙

欧州の宇宙機関も30年までのステーション延長を見据

活動の場は、ステーションが回る高度400kmの低軌道から、月や火星の周辺に移りつつある。日本の宇宙ベンチャー「スペースウォーカー」創業者の米本浩一氏は「ステーションの次を見据えた戦略が必要だ」と指摘する。

新アイデア

きぼうの利用を増やすための新たなアイデアの一つが「宇宙スタジオ」だ。JAXAとスカパーJSATが昨年11月に発表した。円筒形の実験棟にディスプレイを設置。窓から見える美しい地球の映像をパツクに、滞在中の飛行士と地上のスタジオを結んだりリアルタイム番組を配信する。視聴者が携帯端末などで送る自撮り映像を組み合わせて、自分が宇宙にいるかのような気分を味わうことができる。JAXA理事で飛行士の若田光一さんは「これまでにない発想による民間主導ビジネスの先駆け。ますます広がるきぼうの新たな使い方の一歩だ」と期待する。

6月3日(水) 神戸新聞

来週月曜より、いよいよ通常の生活が始まります。いつもの週明けとは違い、この先に多くの「きぼう」を持って。このタイミングだから、忘れてはならない記事にしてほしいものです。